



北海道自然観察協議会

# 自然観察

No.103  
2012.9月

## 目次

- ・2012年全道研修会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- ・第23回滝野の自然に親しむ集い 実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- ・札幌地方研修会のお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- ・ヒグマを知ろう 共存の可能性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- ・蝶の採集と保護 3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- ・フィールドニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- ・ウォッチングレポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- ・会計からのお願い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- ・参加者の声・・ 14
- ・ウォッチングプラン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- ・理事会だより・連絡先・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16



大好物のクルミをゲット！！  
(野幌森林公園 9月)

# 2012 年全道研修会報告

2012年6月9日～10日に実施した全道研修会「静狩湿原と北海道南西・南端の植物」の概略を報告します。参加者は札幌20名・恵庭4名・小樽3名・幕別1名・旭川1名・江別1名・伊達市1名の31名。静狩湿原のみ参加の方以外は札幌駅から中型の貸切バスを利用しました。2日間共に各観察地を、福島町在住の清水和男氏（「山歩青い山脈」代表・当会会員）に自家用車での先導と、各地での植生の説明をいただきました。静狩湿原と折戸海岸・建石浜は地元ガイドが、土橋自然観察教育林・レクの森では森林展示館職員の案内がありました。

一日目は、静狩湿原（長万部町）、千軒・<sup>あみほいの</sup>綱配野（福島町）を現地研修。宿泊は分宿で「民宿たかお」と「まるふく旅館」。夕食後の研修は福島町福祉センターで、後藤美智子氏の「風力発電による低周波の影響」、清水和男氏の「道南の自然ガイド」についての講演を聞きました。

二日目は松前半島最南端部・白神岬（松前町・福島町）、折戸海岸・建石浜（松前町）、土橋自然観察教育林・レクの森（厚沢部町）での現地研修を行い、高速道路の落部IC、国道230号中山峠を通り札幌着。

一日目は終日霧雨の降る寒い一日でしたが、二日目は江差町の鷗島辺りから晴天となり、両日とも



静狩高原にて

あまり虫にも悩まされない好天の下で研修を終えることができました。

全道研修会の静狩湿原は初めてですが、道南の全道研修会は2001年に大千軒岳と海浜植物の2班コースで開催されました。前回に引き続きガイドをいただいた清水氏は、環境保全の取り組みを難しくしているのは、気候的な環境変動より「盗掘」であることを強調されました。環境保全の後継者育成に心血を注がれている氏に、尊敬の念を新たにしました。

## 1. 静狩湿原（長万部町）

オタモイ山の裾野にある静狩湿原は約11,000年前の氷河期が終わった後、大きな潟湖が形成され、数千年の時を経て厚い泥炭層をつくり、ミズゴ



静狩湿原池塘

ケが全体を覆って高層湿原（Fog）となりました。

自然観察 103号（2）



イソツツジの花

高層湿原とは、低層湿原（Fen）に生えているヨシやスゲといった植物が枯れ、堆積が進んだ結果、周囲よりも盛り上がった湿原です。そのため、周辺からは水が流れ込みにくくなり、雨水や雪解け期

以外では栄養がそれほど含まれていない雨水のみとなるため、貧栄養な条件でも生育可能なミズゴケが生えています。高山や高緯度地方に多く、尾瀬ヶ原などが有名ですが、北海道では低地でもみられます。

1922年10月12日、国の天然記念物に指定。当時は600ヘクタールの面積を誇り、他に類を見ない水蘇泥炭地の模範と位置づけられていました。しかし、1939年(昭和14年)から徐々に指定の解除が進められ、戦後は食糧増産と引揚者のための開拓地提供という社会的国策により、1951年(昭和26年)に天然記念物の指定が解除されました。当時は北海道開発の政策の中で開発事業の振興が優先され、静狩湿原の学術的価値が十分に評価されなかったと考えられています。

湿原の開拓はほとんど成功せず、広大な開拓地

が放棄されました。静狩湿原はバブルの時期に細分化されて売り払われ、現在は200m×600mほどが残るのみとなりましたが、近年は乾燥化が進行し笹や樹木が入り込んできています。静狩湿原は全く観光化されていない湿原であるため、木道や遊歩道などは一切ありません。小規模の池塘の痕跡も残っています。アギスミレ、イソツツジ、ウメバチソウ、エゾリンドウ、タチギボウシ、コツマトリソウ、コバノトソウ、コホウネ、サワラン、サワギキョウ、コタヌキモ、ツルコケモモ、トキソウ、ナガボノシロワレモコウ、ノハナショウブ、ハイイヌツゲ、ヒツジグサ、ヒメシヤクナゲ、ホロムイソウ、ホロムイツツジ、ミズトンボ、ミツガシワ、ミツバオウレン、モウセンゴケ、ワタスゲなどがあります。(下線は開花していたもの)

## 2. 千軒・網配野(福島町)-網配川河岸段丘-

2003年に閉校になった福島町立千軒小学校裏から続く散策路は、手つかずの大自然がそのまま残っています。ミズナラの純林にスギやトドマツの人工林。南方系のリョウブ、サワグルミ、ブナ、キブシ、ヒバなどが生育しているかと思えば、北方系のトドマツやエゾマツ、イチイ、ハルニレ、ツルアジサイなどが生育して、ブナ帯北部の特徴が表れています。

ソバ畑の休耕地でエゾユキウサギの出迎えを受けながら森の散策路に入ると、開花期の主な草本はオオイワカガミ、ナガハシスミレ、キバナイカリソウ、チゴユリ、ツクバネソウ、ラン科数種などがありました。

主な木本:リョウブ、キブシ、ミズナラ、ブナ、サワグルミ、トチノキ、オオバクロモジ、サルトリイバラ ヒメシヤクナゲなど。その他:ヤハズソウ、ヨツバムグラ、ホドイモ、クサボタン、キカラスウリ、アカネなど。  
☆オオイワカガミ(イワウメ科)・イワカガミ(イワウメ科)・オオイワカガミはイワカガミの変種で、鋸歯も多く葉も大振り。花冠の色は白色～淡紅色。道内では渡島半島の多雪地帯の樹林下に生える。

## 3. 松前半島南端部・白神岬(松前町・福島町)

白神岬を含む矢越岬(知内町)から折戸海岸(松前町)に至る海岸線は道立自然海岸に指定されており、その景観と共に生物環境も保全対策が必要とされています(渡り鳥観察調査地)。北海道最南端部の自然の現況を観察し、自然利用における問題点を把握しました。主な観察植物:オニオトコヨモギ、ラセイタソウ、ヤブマ

北海道南部は黒松内低地帯を北限とするブナ帯の一部で、ブナが優先する森林地帯です。黒松内低地帯は、気候区分による温帯と、冷温帯の境界です。ブナの自然林はそこで消えてしまいます。道南は本州北部の植物も自生していれば、北方系の植物も自生する、南限と北限の植物が入り交じっている地域なのです。

しかし、歴史的に早くから開けた道南は、漁業の盛んな頃、魚油、魚かす、魚箱などを生産するために木材として、また燃料として伐採され二次林となったり、スギやトドマツの植林地となったところもあります。

### ☆知内川上流の砂金採掘遺構

大千軒岳の名前は、昔砂金取りの家が千軒もあったからとも言われているほど、豊富に金が取れた金山。その大千軒岳から流れ出る知内川は、北海道で最初に金山が開発された場所であり、今でも砂金を採取できる。上流部には川に沿って大千軒岳(1,072m)への登山道があり、知内駅はJR津軽海峡線が青函トンネルを出て最初の旅客駅。

オ、アオツヅラフジ、アオノイワレンゲなど。イブキボウフウ、ウシノケグサ、エゾスカシユリ、オオジシバリ、コウゾリナ、センニンソウ、タイトゴメ(ミヤママンネングサ)、タチシオデ、ツルヨシ、ハマオコトヨモギ、ハマハコベ、ハマウツボ、ハマヒルガオ、メノマンネングサ、オオミミナグサなど。

☆ラセイトソウ(イラクサ科)・ヤブマオ(イラクサ科)

ラセイトソウは海岸に生える多年草。ラセイトソウはヤブマオに似ているが、海岸植物特有の厚みのある葉がラセイトソウの特徴。特に葉脈が深く立体的な質感は、他に似たものがない。また、葉の片側だけが裂けることがあるのもラセイトソウだけの特徴。花序も密でほかのヤブマオの仲間と比べると短い。ヤブマオは、林縁ややぶに生える多年草。雌花の集団はびっしり密接してつく。ヤブマオの葉は卵形で基部が円形基部は切形になる。花の軸や茎が多少なりとも赤味を帯びる。ヤブマオの植物体には顕著に赤味を帯びる部分はない。

☆タイトゴメ(ミヤママンネングサ)(ベンケイソウ科)・

メノマンネングサ(ベンケイソウ科) 多年草のタイトゴメは、海岸の岩場に生育する。葉は多肉質の円柱形で、茎に密生して付く。日当たりの良い場所や冬季には赤くなることがあるが、通常は緑色。花の枝は短く茎の上部に密生して付く。細長い葉の形が大唐米に似ているところから付いた名前。大唐とは外国の「アジア」のことで、葉がまずい外米に似ている。メノマンネングサは海岸から低山地の岩場、石垣などに生える多年草。茎は地表を這い、先で斜上又は直立し 15 センチほどになり、普通赤みを帯び、よく分枝する。葉は互生し、円柱状で先は丸い。花序は 3 出集散状で、多数の花をやや密に付ける。花は 5 弁で濃黄色。花期は 5~6 月。

#### 4. 折戸海岸・建石浜(松前町)

海岸生物が豊かな折戸海岸は、海浜地の中心部が町指定の海水浴場になっており、自然環境への人為的インパクトが大きい。

折戸海岸南部につながる建石浜は自然保全状態が比較的に良好で、特に赤石浜(通称)から弁天島北浜に至る海浜は長大な塩湿地が形成されており、後背地(海岸段丘)の建石野と共に貴重な観察地になっています。

海岸への踏み分け道にはヒグマの糞もあり、草原群落内にはいくつかの獣道もみられました。

☆主な開花中の観察植物はオオジシバリ、イソスミレ、アナスミレ、ウミミドリ、エゾツルキンバイ、ミヤコグサ、ハマボッス、アサツキ、ハマエンドウ、ハマヒルガオなど ☆コハマギク(キク科)は開花期ではなかったが、北海道では太平洋側の北限地が松前。ピレオギク(キク科)は日本海側の大成町(八雲町)が南限。

##### 《松前半島の海浜植物》

羊葉植物門 オニヤブソテツ  
裸子植物亜門 ハイネズ  
被子植物亜門

##### 《江差の浜-海底文化財》

開陽丸の沈没から一世紀あまり経った昭和 50 年、開陽丸の船体と遺物の数々は、日本で初めての海底遺跡に登録されました。海陽丸はオランダの造船所が徳川幕府の発注を受け建造されたもの。当時、日本最強の木造機帆軍艦で、明治元年の戊申戦争中、暴風のため江差沖に座礁、沈没

##### ・単子葉植物綱

エゾカンゾウ、エゾスカシユリ、エゾネギ、オオイノケグサ、クルマユリ、コウボウシバ、コウボウムギ、シバ、スズメノヤリ、ルツボ、ノハナショウブ、ハマエノコロ、ハマニンニク、ヒメイズイ、ヒメヤブラン、ヤブカンゾウ、ヤマアワ、ヤマユリ

##### ・双子葉植物綱(離弁花綱)

アオツヅラフジ、アオノイワレンゲ、アカバナ、アキカラマツ、ウミミドリ、エゾカワラナデシコ、エゾツルキンイ、エゾミソハギ、オカヒジキ、オオマツヨイグサ、カラフトニンジン、キリンソウ、クサフジ、クサボタン、コモチレンゲ、センニンソウ、ダイヤモンドソウ、ドクウツギ、ツルナ、ツルフジバカマ、ツルマサキ、ナガボノシロワレモコウ、ハマダイコン、ハマエンドウ、ハマゼリ、ハマナス、ハマハコベ、ハマハタザオ、ハマフウロウ、ヒロハヘビノボラズ、ヒロハカワラサイコ、ヒロハクサフジ、マツバトウキ、ミヤコグサ、ヤブマオ、ラセイトソウ

##### ・双子葉植物綱(合弁花綱)

オオアキノキリンソウ、オオジシバリ、オニオトコヨモギ、イブキジャコウソウ、ウツボグサ、ウンラン、エゾオトコヨモギ、コハマギク、キバナノカワラマツバ、シロヨモギ、スナビキソウ、ツリガネニンジン、ナミキソウ、ノコギリソウ、キタノコギリソウ、ハチジョウナ、ハマオトコヨモギ、ハマニガナ、ハマヒルガオ、ハマベンケイソウ、ハマボッス、ヒロハウラジロヨモギ、ヤクシソウ、ユウゼンギク

しました。この海陽丸を復元し、青少年研修施設として、海底遺跡の史跡の展示を中心に、海陽丸と江差の関係や歴史と構造、乗務員の生活、海底遺跡発掘調査の状況などを伝えています。

#### 5. 土橋自然観察教育林・レクの森(厚沢部町)

平成 12(2000)年、厚沢部町の南西部に位置する。面積約 89ヘクタールの町有林。国有林から町有林に移管されてから、その利用と維持管理に、町と地元ボランティアによる懸命な保護活動が続

けられていますが、一自治体として厚沢部町が管理する大変さを感じながら、豊かな林床植生などを観察しました。1679年(延宝6年)松前藩著直轄だったヒバ林は、現在もヒノキアスナロやラン科が豊

富な森です。自生北限となるヒノキアスナロ（ヒバ）や、自生南限となるトドマツをはじめ、約 560 種もの植物が生育しています。絶滅した種の復元というより、現存種を保全しています。母のように温かい包容力があると言われる「ブナ婆さん」と、厳格な父親に見立てて名づけられた「ヒバ爺さん」が存在します。樹齢 500 年とも 600 年とも

言われている「ヒバ爺さん」を観ました。オオチドメ、キバナイカリソウ、キブシ、コタニワタリ、サルトリイバラ、タニウツギ、ツバメオモト、ツルリンドウ、ノボタン、ラン科の数種、自生北限のヒノキアスナロ、ヒメアオキ、ミツバウツギなど、道南ならではの植物が観られました。

報告者 須田 節

参考：《土橋自然教育林に報告された絶滅危惧種（2001 年北海道・2000 年環境省）》

ヒノキ科：ヒノキアスナロ

ウマノスズグサ科：オクエゾサイシン、ウスバサイシン

ナデシコ科：タチハコベ

キンポウゲ科：フクジュソウ、シラネアオイ、ヤマシャクヤク



オオジシバリ (折戸海岸)

オオイワカガミ

アギスミレ (静狩湿原)

## 第 23 回 滝野の自然に親しむ集い 実施報告

実行委員 池田政明

今年は滝野自然学園の抽選で第一希望日が取れなかったのですが、お盆にもかかわらず一般参加の 4 家族 11 名と、指導員 8 名で『滝野の集い』となりました。

指導員は会を盛り上げるためにも、キャンプファイヤーでは歌やゲームに頑張りました。また、1 日目の『せせらぎウオッチング』『飯盒炊事・ジンギスカン』『夜の集い』『星空ウオッ

チング』『ナイトハイク』、2 日目の『朝の集い』『自然観察ハイキング・ビンゴ』を、精力的に進めていきましたが、特に星空ウオッチングは、ベストコンディションで大好評でした。

今年は、指導員も少数体制でしたが、参加された家族とも交流を深め、楽しく過ごすことができた集いでした。

実施日：2012 年 8 月 11 日[土]～8 月 12 日[日]

参加者：一般 11 名[大人 5 名、子供 6 人]

指導員 8 名 計 19 名

### (1) 取組の経緯

- 5/19 (土) 第 1 回実行委員会 市民活動サポートセンター
- 7/26 (木) 学園に利用申込み書等必要書類提出
- 7/28 (土) 第 1 回下見 ハイキングコース[西エリア]、厚別川、裏山
- 8/ 4 (土) 第 2 回下見 ハイキングコース[西エリア]、厚別川[草刈り]、裏山計画細部の最終確認
- 8/ 7 (火) 参加者申し込み締め切り、参加者名簿完成、班編成 学園に参加者数・給食数変

自然観察 103 号 (5)

更連絡、指導員マニュアル作成発送、保険手続き

- 8/ 9 (木) しおり印刷、各種資料印刷、名札書き、雨天時のビデオ準備  
8/11 (土) 第 23 回 滝野の自然に親しむ集い[1 日目]  
8/12 (日) 第 23 回 滝野の自然に親しむ集い[2 日目]、情報館[クラフト室]で反省会  
8/16 (木) 札幌市教育委員会へ後援行事終了報告書提出

## (2) 内容と反省

- ・北海道ウォッチングガイドを見ての参加は、4 家族のうち 2 家族あった。
- ・魚などが減少しているで他の場所を検討したが、それに代わる適当な場所は見つからなかった。
- ・川床が滑りやすかったのですべり対策が必要。でも子供たちは結構楽しくやっていた。
- ・ジンギスカン・おにぎり炊事は美味しかったが、その分カレー炊事より時間が多くかかった。
- ・ナイトハイクは、いつもより森の中が暗かった。誘導は白っぽい服装または、森に入る前に少し目を慣らしてから入ってはどうか。反面、雲が光で反射して暗くなった分、珍しい発光細菌が鮮明に見ることができた。
- ・夜空も晴れわたり、夏の大三角形をはじめ、天の川や流れ星などはっきり観察できました。
- ・懇親会では、子供たち用に別のテーブルを作ったのがよかった。
- ・朝の散歩では、草笛が子供たちに好評だった。
- ・網でオオルリボシヤンマや、田んぼの中の生き物を採集し観察することができてよかった。
- ・札幌市内でこれだけの自然を満喫することができ、夏休みの良い思い出ができましたと参加者からの声があった。

## 札幌地方研修会のお知らせ

～アイヌ文化に学ぶ自然と環境

北海道に私たちが住む以前から、先住民としてアイヌの人たちは、魚狩猟や、植物採取を主な生業にして暮らし、また他の地域の人たちと交易を行っていました。

自然環境の保護と共生が問われて久しい今、世界の先住民族が共有してきた物を大切に自然と共に生きてきた生活様式や伝統文化が見直されています。この度の研修会では、アイヌの人たちの自然観、自然とのつきあいかた、生活とのかかわりなどを学び、より理解を深めたいと考えています。北海道では第一人者でアイヌ民族に詳しい、計良光範さんに語ってもらいます。会員のご参加をお待ちしています。

<プログラム>

◇日時：2012 年 10 月 28 日 (土)

◇集合：札幌市アイヌ文化交流センターピリカコタン(札幌市南区小金湯 27)

◇講師：計良光範氏(ヤイユーカーラの森運営委員長、北海道教育大学非常勤講師)

◇内容：・開会式 午前 10 : 10 ~ 10 : 20

・講演 アイヌ文化と自然 I 10 : 30 ~ 12 : 30、  
アイヌ文化の歴史と自然 II 13 : 20 ~ 14 : 40  
屋内外展示資料アイヌ民具等見学

・閉会式 14 : 50 ~ 15 : 00

◇会場へのアクセス

・車では、国道 230 号線で札幌中心部から約 40 分、じょうてつバスでは、大通西 11 丁目から、定山溪線「7」「8」、約 60 分、地下鉄南北線では真駒内駅から、真駒内線「12」、約 40 分

いずれも、「小金湯」下車

◇参加費無料(但し昼食持参)

◇定員 20 名(先着順)、葉書または F A X で。

◇問い合わせ・申込先：池田政明

電話・F A X 011-708-6313 〒001-0045 札幌市北区麻布町 4-9-16

## ヒグマを知ろう 共存の可能性

山本 牧 (理事、NPOもりねっと)

ヒグマ解説の最終回です。

ヒグマがそれほど攻撃的ではなく、好奇心旺盛で学習能力が高く、1頭ずつの行動や性格まで見極めて対応しないとイケない、複雑な生きものだということがおわかりいただけたと思います。

昨年は札幌市中央区の住宅街に小型のヒグマが現れ、今春射殺されて、大きな騒ぎになりました。全道的にあちこちで人家近くへの出現が相次ぎ、「何か異変が起きている」と感じている方も多いと思います。

しかし、実際に出没現場をよく確かめると、確かに人家近くに出てきているのですが、どうも人を襲ったり、食べ物をあさりに来ているとは思えません。むしろ、間違っって市街地に迷い込み、戻るに戻れず、人目を避けながらうろろしていた、という状況が多いように感じます。

若いヒグマ、特にオスは独り立ち後、かなり広い範囲を落ち着き場所を探して歩き回ることが知られています。個体にとっては冒険ですが、種にとっては遺伝子を交流させ、分布範囲を広げていくために必要なことなのでしょう。

この時期の若グマは好奇心が特に強い反面、警戒心が薄く、行動が不安定で先が読めません。ちょっと人間とも似ていますが、そういう時期なのです。そんなに「悪気」はないのですが、小型とはいえ、強力な爪や牙を持っているので厄介です。襲うつもりはなくても、市街地で人と急に出くわしたり、興奮したりすれば、事故を起こすことは十分考えられます。

人間が遠慮して入る山の中と違い、人家付近は人間も安心しているので、ヒグマとの距離感をはるかに遠いことが必要なのです。

### ■ 出没の背景に行動の変化

1970年代に急減した北海道のヒグマは、無差別捕殺となっていた春グマ駆除制度や奨励金が廃止され、少しずつ生息数は回復しています。一方で、山村の離農やハンターの高齢化と減少は続き、ヒグマに対する人間側の圧力は弱まっています。

正確なデータはないのですが、どうやら生息数の回復以上に、人間を恐れなくなったという、



牛舎で自動撮影されたヒグマ

行動の変化が、ヒグマの行動を大胆に、より人家近くに来させているような感触があります。

ヒグマの糞などから見る食性調査や被害統計でも、特に夏の終わりから秋にかけ、農地でデントコーンやスイカ、メロン、小麦などを大量に食べている状況がうかがえます。

数が増えたから出てくるとか、ドングリが不作だから人里に来るとかいった、単純なものではなく、人間との距離感が変化し、そのことがヒグマの行動や心理を変えてきている可能性があります。つまり、ただ駆除をすればいいとか、ドングリの豊凶に由来する天災ではなく、人間がヒグマとの関係を考え直し、新たな対応をしないと、この状況はどんどん悪く、エスカレートしていく恐れがある、ということです。

その意味では、多くの専門家は、札幌での出没を「特別なことが起きた」のではなく、「これまで道内各地で起きている人里近くの出没騒ぎが札幌にも及んだ」、つまり、札幌の山沿いの地区で、道内の中山間地帯と同じことが起

きた、と考えています。もちろん、それはほっといいことではなく、ヒグマを警戒しながら生活している他地域の人と同じように、札幌市民も空騒ぎではなく、本当のリスクを見極め、有効な対策をとる必要がある、ということです。

#### ■空騒ぎではない対策を

では、どんなことが必要なのでしょうか。短期的な集団登下校や物々しいパトロールは、無意味とまではいいませんが、一時の警戒心や敵対心をあおるだけで、有効な対策とは言えません。子供たちへの教育としても、単に怖がらせるだけで、「野生とのつきあい方」を考えるには、大人が右往左往する姿を見せるのはかえってマイナスです。



最も大事なことは、ヒグマとはどういう生きものかを知り、適切な距離感や緊張感を持つことです。もちろん人里では人間が優先されますから、ヒグマが野放図に近づいてくることを防ぐことも重要です。

対策を人間向けとヒグマ向けに分けて考えてみます。

人間向けでまず必要な方策は、ヒグマを呼び寄せない、ということです。山沿いの畑でヒグマの好物を作付けしない、生ごみを放置しない、コンポストや干し魚を避ける、などです。

札幌市西区の出没では、孫にスイートコーンを食べさせるのが楽しみだったおじいちゃんの畑が荒らされ、市の担当者が「ヒグマを呼び寄せないよう、トマトに変えてくれませんか」とお願いして、畑荒らしを防いだことがあります。おじいちゃん是不本意でしょうが、これも対策なのです。プロの農家は、ヒグマが好むスイートコーンやエンバクを山沿いに作らない、という工夫をします。

クマが近づきにくい環境、という点では、草刈りも意外に有効です。最初は用心深いヒグマは、全身をさらす空き地が苦手で、道路脇や川

筋、家の裏を数メートル草刈りしただけで、出没が止まった例があります。しかし、味をしめてしまったクマは、白昼堂々と姿を見せながら出てくることもあります。

もっと直接には電気柵も役に立ちます。高電圧パルスを目立つワイヤに流すもので、鼻筋などが触れるとバチン、と電撃が走ります。きちんと張った電気柵はとても有効で、一晩に数頭が食い荒らすコーン畑が、電気柵で囲っただけで被害ゼロになった例があります。しかしこれも、「きちんと張る」が大切で、ワイヤの高さや間隔、電圧漏れを防ぐ草刈りなどのメンテナンスが欠かせません。

「電気柵は効かない」という声を聞きますが、大半は張り方やメンテが悪いのです。また、悪い張り方で突破できることを教えてしまった場合、ほかの電気柵も壊されてしまいます。不適切な電気柵は、地域全体の効果を損ねるのです。

#### ■痕跡が読める専門家が必要

人間向けとしては、大人も子供も含めた「教育」が一番大事かもしれません。「殺し屋ヒグマが来ているぞ」と考えるのではなく、「迷い込んだクマが困っている」と考えれば、生ごみを片付け、ヤブや物陰、川べりに不用意に近づかない、痕跡は通報して分析に役立てる、といったことができます。

目撃通報は断片的なことが多く、特に件数だけの比較は意味がありません。1頭が迷い込めば、目撃件数は跳ね上がります。過疎地でいつも出てくる土地では、誰も通報をしません。体の大きさも、あまり当てにはなりません。糞や足跡、通報内容を総合して分析し、どんな個体



小屋を荒らす親子熊

がどこを移動しているか、何をしているかを推定する専門家が欠かせません。専門家の判断と、



行政や地域の活動がかみ合って、初めて有効な対策が実現します。対策に最も欠けているのは、こうした分析と判断力を備えた専門家の存在なのです。

ヒグマ向けには何ができるでしょうか。一般には「見つけたら駆除」という方針があります。しかし、本当は「どんなクマが何をしているのか」の分析が必要なのです。その上で、駆除する場合は、問題グマを特定し、安全な場所で撃つこともありえます。ヒグマ対策班の専門家が7人、常時対応する斜里町の場合、2000件近い目撃通報に対し、射殺駆除は2-3頭です。正確な駆除ができるから、ぎりぎりまで見極めることができるのです。

最近ヒグマを追跡できるハンターが減り、駆除の大半はオリ捕獲になっています。これだと、本当の問題グマが捕まらず、初めてやってきたクマばかりが捕殺されることになります。ある町では、牛舎が立て続けに襲われ、数頭をオリで駆除しましたが、被害は止みませんでした。被害現場に残されたクマの体毛のDNAは、捕殺されたクマとは一致しませんでした。つまり、真犯人はオリを避け、荒らし回っているのです。

#### ■クマにも教育が必要

クマ向けのいちばんの対策は、人間向けと同じく、「教育」だと考えます。人間は怖い、嫌な奴らだ、とヒグマに思ってもらうことが、ほどよい距離を生み、結局はお互いが不幸にならないですむのです。市街地に侵入されてしまう前、農作物が恒常的に荒らされる前に、人為的な食べ物の味を覚えないうちに対処し、時には実力で追い払うことが必要です。ここでも、そうした判断力と実行力を持った専門家（クマレ

ンジャー）が期待されます。

上記のようにオリは正確な対策には不向きです。銃は必要ですが、制約も多く、万能ではありません。意外に有効なのは、訓練された犬ではないかと思います。

犬はにおいに敏感で、ヒグマの痕跡や接近を知らせてくれます。きちんと訓練すると、直接的な追い払いにも活躍してくれます。夜中や人家近くでも、あまり運用の制約はありません。

ただ、ペットの犬は別です。もし、散歩の途中、犬が何かに気づいても、けして引き綱を離してはいけません。向かっていった犬が、ヒグマにおびえて飼い主の元に逃げ戻ったとき、後ろに興奮したヒグマが追いかけてこないとは限らないのです。犬が何かに気づいたとき、むやみにけしかけたりしないで、静かに引き返しましょう。

世界的に見て、北海道のヒグマは行動範囲がとて狭いことが知られています。アラスカの10分の1、カナダ北西部の100分の1くらい。それは、この北海道がとて豊かで、小面積でヒグマの生存を支えられる自然があることを意味します。そこに550万人の人口が一緒に住んでいることは、これまた世界有数の過密、混在状況です。

豊かな自然の象徴としてヒグマと共存する道を選ぶなら、それは、何もしないことではなく、人間の側が相手を知り、かなり工夫しないと実現できません。「共存」は何となくできるのではなく、確かな「共存の思想」と「共存の技術」が必要です。その考え方は、ヒグマに限らず、この島の自然界全体と末永くつきあっていくために、とて大事なことだろうと思います。

## 蝶の採集と保護 3

### 北大総合博物館ボランティア（元高校教員）青山 慎一

辞書によれば乱獲とは「絶滅のおそれがあるくらいまで、むやみに採ること」とある。確かに、野草などのように再生に時間のかかるものでは乱獲によって絶滅に瀕することがあるかもしれない。しかし、チョウに関する限り絶滅をまねくほどに採ることなど不可能なことだ。私はこれまで昆虫の保護に関する事業や会議に関わることが多かったので、詳しく調べてみ

たが、いわゆる乱獲とか採集圧とかによってチョウのある種が絶滅したという事例は国内外とも見つけることはできなかった。

想像してみてください。チョウの採集場所として適しているのは、一般には溪流沿いの林道で、日当たりの良い広場となっているような所である。そこにチョウが好んで吸蜜するような花でも咲いていれば申し分ない。さて、その絶好のポイントで1～2時間採集を楽しんだとし

よう。その結果、その領域で発生していたチョウの何%を採ることができると思いますか？

一つの地域で発生するチョウの個体数を調べるにはマーキング法（マーキング再捕獲法）という方法があるが、誤差が大きいので最近殆ど使われていない。したがってここでは残念

ながら科学的な根拠のある数値を示すことはできないが、長年の経験から多く見積もっても10~20%程度であろうと私は思っている。わかりやすい計算をしてみます。

これは私が丸瀬布町で採集したカラフトタカンキマダラセセリの採集データです。

採集年月日	採集個体数	推定捕獲率	発生個体数	生き残り個体数
1965. 6. 22	10♂	20%	50 頭	40 頭
1965. 6. 25	86♂4♀	50%	200 頭	100 頭

つまり、沢山採ったということは沢山発生していたことの証明でしかない。一般に活発に飛び回っているのは♂で、♀が少ないのは他のチョウでも同じであることが多い。

表は日本野鳥の会が発行したパンフレットに掲載されたもので、ドイツの鳥類生態学者 Rorig の実験データである。これによれば1羽のシジュウカラが一年間に補食する虫の数は、マツシャクトリガの幼虫（終令で3cmほど）に換算して125,000匹という。

私のコレクションは現在、1,011箱になっており、個人が所蔵するものとしては国内有数と言っていいと思っている。このコレクションは私がおよそ50年の歳月をかけ、38カ国の同好者と交流を持ち、6カ国14回の海外遠征を行い、150人以上もの仲間の協力と援助によって築き上げたものである。それでも標本の数は約85,000頭に過ぎず、エナガ1羽の1年分にも遠く及ばない。

さて、これからは決して数字上の遊びではない。2つの例を紹介しましょう。オオイチモンジという大型のタテハチョウは本州では長野県上高地付近に生息する高山蝶で、現地では保護蝶になっている。北海道では平地で見られ多

産するところも多い。その中でも大雪山麗のユニ・石狩林道（保護区ではない）では黒化した異常型の発生比率が高いことで人気があり、発生期には全国各地から愛好家が集結する。話によれば各人がリンゴなどの果物を発酵させた誘引トラップを持参して成果を競い合う様は壮観であるという。

それでもオオイチモンジの数は減ることなく、黒化型も一定の割合で見られ、今年は昨年



オオイチモンジ 10 VII 1975  
丸瀬布町金湧山林道 川田光政氏撮影

#### シジュウカラ等のたべる虫の量(Rorig)による

種名	キクイ タダキ	エナガ	コガラ	シジュウ カラ
	夏(200日)1日に要する乾物量	1.80g	2.49g	2.86g
冬(165日)1日に要する乾物量	1.44g	1.99g	2.42g	2.38g
1年間に要する乾物量の重量	600g	800g	1,000g	1,100g
上記乾物量に相当するマツシャクトリガの虫の数	夏1日	209	290	333
	冬1日	167	231	277
	1年間	69,000	96,000	113,000

に続いて豊作であったと聞いている。

また、本文の冒頭で紹介したヒメギフチョウも道内各地に他産地が知られているが、静内町には、イエローバンドと呼ばれ、通常の個体と色調の異なる遺伝型が採れることで人気が高く、同じように多数の愛好家が訪れている。今年は春先の天候が不順で発生期の予測が難しかったようだが、例年並みの発生が見られたという。

このように、多数の愛好家が採集を続けても毎年同じように発生しているチョウを私たちは「普通種」と呼び、「こんなことが続けられれば絶滅するに違いない」と憶測する人たちは

「絶滅危惧種」と呼ぶ。

ご理解いただけるとと思いますが、私は「チョウを自由に採らせる」と主張したいわけではありません。チョウの保護は必要です。なぜならユニ・石狩林道や静内が多産地であり続けているのは周辺の自然環境が保存されているからであって、そうでない地域のチョウは確実に減

っているからである。チョウだけではなくトンボもバッタもカメムシも何もかもが悲しい程に少なくなっている。一体どうしてなのでしょう。

次回は昆虫が少なくなってしまった本当の原因と保護行政のお寒い現状とについて意見を述べたいと思う。

(この原稿は 2011 年に書いていただきましたが、編集の都合上、今回になりました。そのため、発元年等については前年になります)

フィールドニュース



FieldNews

## 聚富の風につつまれて

石狩市厚田区聚富 福岡 順子

私の住んでいる所は、とても風の強い所です。ヨシやススキが生え、冬になると雪は横に降り、柏の葉っぱがビュンビュン飛んできます。虫やカエル、鳥、ヘビ等がいっぱいいて、夏は蚊が大発生します。春になると、アカゲラが近くの木をたたき、なぜか我が家のエントツのてっぺんをカンカンカンとつついて飛んで行きます。(家の中はすごい金属音) 6月にはオオジシギがやって来て騒ぎます。電柱やテレビのアンテナにとまり、グチュグチュと言います。「来たよ」と合図をしてくれている様で「来たの」とつついっ声をかけてしまいます。ポーズをとっている様でおかしいです。

ここはトンボの大発生が年2回あります。風に乗って海から国道へ集団で流れて行きます。そんな時は、モズは木にとまったまま、首をの

ばして口をパクパクし、トンボ食べ放題になります。

何度か鹿もやって来ました。いつも群れのなかの1頭がこちらとしっかり目線を合わせます。何だか、見ない方がいい雰囲気なので家の中で隠れていると、鹿サン達は防風林にすわり、ずっと夕陽を見ていました。「鹿も夕陽を見るんだ一、私達と同じだ」と思いました。ここは鹿が撃たれる地区です。ちょっとだけ、ゆっくりしていったのかもしれませんが。

「風の強い所」にちょっと憧れて引っ越しましたが、とても楽しい所です。何よりも自然の中での動物サン達の生き方が、スゴイスゴイと思う毎日です。そして、いつか石狩のコウモリ観察会をする事が夢です。

## 北海道の春

千葉県松戸市 渡部浩一

北海道は、気候・自然風土に恵まれた素晴らしい土地である。手元にある資料によると葺が530種を超え、野鳥は旅鳥・渡り鳥を含め420種以上が確認されている。それら全てを目にすることはできませんが、興味をもって観察すれば、日常生活の中でもかなりの数を確認できるという環境の多様性があります。

春の語源は「晴る」「墾る」「張る」とも云わ

れるが、春を分解すれば三人の日とも読める。長い間、寒さに縮こまり、家の中に閉じ込められていた人々が屋外に出て、そこそこで立ち止まり談笑しているのが春・・・そう考えるのも悪くない。暦どおりにいけば4月も中旬、身近に春の訪れがただよってくる筈であるが、数年来の豪雪と寒気の居坐りで、その気配は甚だ心もとない。

私の頭の中にある春の景色と現在の春は、些か異なる。見渡す限りの菜の花の黄色、レンゲ畑の嬉々とした赤色・風にそよぐ麦畑の緑・耕された黒色の土、これらが春の風景であった。ビニールハウスの立ち並ぶ畑は、どこか工場群を思わせ、風情が無い。虫や鳥が縁遠くなるわけである。土を耕すことは、心を耕し、身体を耕し、頭脳を耕し、人間関係を耕す。土を耕すことは、一年の始まりの確認で、稔りの季節を迎えるための出発点、歓びをつかむ為の旅立ちである。慈しみ育んできた農地や花壇を、耕すことさえ許されぬ多くの人達が、どんな想いで春を迎えるのであろう。

大震災から一年余、頸草の如く踏んばる方々

に、ただ頭を垂れるだけである。

あと一月ほどで、北海道に春が溢れる。北海道の春は、梅も桜もチューリップも水仙も、皆いっぺんに花開く。順番の公式があてはまらないのが、北海道の春なのである。透明な光がはじける春、眠っていた全ての動植物が一斉に動き出し命の喜びが躍動する春、春を待たない生物は存在していない。雪解け水の沢を渡り、南向き斜面を足を滑らせながら這いずり回る。山菜採りは春一番の楽しみ。鶯の初音が心地良い。ニリンソウ・カタクリ・アズマイチゲ・ナニワズ・エンレイソウ・エンゴサク・・・春の草花は可憐な乙女、いささかの汚れも無い。至福のひとつときである。

## ウオッチングレポート



札幌市清田区 平岡公園 2011/9/11

札幌市北区 屯田防風林 2011/10/2

天候 曇り

天候 小雨のち曇り

### 人工湿原の変わる様子を見よう

### 秋の紅葉と木の実

今回は蝶に詳しい問田さんを頼んでの観察会です。

アイノミドリシジミ、ヒョウモンチョウ、モンキチョウなど、ヒトリガの毛虫

オシロイシメジ、タマゴタケ、サクラシメジなどのキノコ。

サラシナショウマ、ギンリョウソウモドキ、エゾノヒツジグサ、サワギキョウ、ナガボノシロワレモコウ、アキノウナギツカミ、ミゾソバ、オオミゾソバなど。

花は少ないが、色々話題の多い楽しい観察会でした。

佐藤佑一

昨日からの雨模様、朝になっても止まない。今日は残念ながら中止かと思っていたら、参加者が一人、また一人と集まってきた。

天然防風林から加算すれば、優に百年を経過しているこの保安林。近隣の人々の植栽も混入しているものの、やはり植生の種類は多くなっている。

ドイツトウヒ、シンジュ、ヤチダモ、ポプラ…、草本ではオオウバユリ、イワミツバ、ゴボウ、オオハンゴンソウ、オオバコが特に目立つ。

小雨、風、曇り、晴れと秋特有の天候変動も加わり、バラエティに富んだ、楽しい観察会であった。

澤田八郎

### 会計からのお願い

#### 会費の納入をお願いします

当会は、会員各位の会費によって運営されています。おかげ様で順調に納入されていますが、会費をまだ納めていない方は同封の振込用紙をご利用下さい。

年会費は1,500円です。また未納期間は2年は3,000円となります。振込用紙を確認の上、納入をお願いします。

★退会の申し出があるまでは北海道自然観察協議会の会員です。

届けが出されるまで、会費をお支払いしていただきます。

★郵便振替口座 02710-1-8768 北海道自然観察協議会

会計 畑中 嘉輔 Tel 011-581-543

札幌市厚別区 大谷地の森 2011/10/8

天候 晴れ 掲載紙 赤旗 まんまる新聞

### 秋の森を歩く

素晴らしい秋晴れの日。ようやく色づいてきた木々の間を縫って走る、旧千歳線軌道あとの、サイクリングロードをにぎやかに歩く。途中、昔の汽車での逸話などを紹介する。大谷地神社では、厚別開拓当時の血と涙の日常を偲びつつ、境内を散策する。

市保存樹林の林床にはセンボンヤリが綿毛をつけて群生している。社務所裏手では、コナラのドングリと殻斗の山に歓声が上がる。大谷地の森公園の入口付近ではシナノキの果実に皆さん興味津々。花や実は本来葉であることを説明するとようやく納得する。

今回は時間が不足で、予定していた自然観察ビンゴが出来なかった。来年度からは、9時半集合にした方が良くと思う。

根岸徹

恵庭市 恵庭公園 2012/5/12

天候 曇り 掲載紙 道新 その他

### 春の緑につつまれて

5月12日(土)「春の緑につつまれて」と題して「恵庭公園」観察会が行われた。当日は、あいにくの天候だったが、参加者は指導員13人、一般22人の計35人。3つのグループに分かれて観察した。

ニリンソウはこの春も白く群生し、春らしい雰囲気を作っていた。そして何とんでもミドリニリンソウがいい。緑と白の神秘的な美しさが人気の的だった。

グループの中に、本州から北海道に移り住んだ人がいて、この公園の植物の美しさに素直に感動し、興味を持っている姿を見て私は、「自然観察会」の原点を見たような気がした。風の強い日だったが、いい観察会だった。

富塚陽子

札幌市北区 屯田防風林 2012/2/26

天候 晴れ 掲載紙 道新

### スノーシューをはいて…

創成川下水処理場で浄化された暖かい放流水が河川に注ぎ込むため、冬季はカワセミやチュウサギなど珍しい水鳥が飛来し、隠れた観察スポットになっています。

観察会では、ヒドリガモやマガモ、カイツブリなどを見ることが出来ました。水鳥は食べる餌により、尾羽の形や潜水の方法も異なるとの解説がありました。

防風林では、アカゲラをはじめ、ヤマガラ、ハシブトガラ、シジュウカラなど、カラ類を多く見ることができ、それぞれの詳しい見分け方を学びました。

樹木では、オニグルミ、イチョウ、カツラの冬芽を観察して、冬の寒さから身を守る為に色々な工夫がなされていることや、翌春、芽になる部分や芽鱗痕をはじめ、葉柄痕を良く眺めると、人や動物の顔に見えてくるなどの楽しみ方を学びました。

また、水辺や林の鳥達は、一足早い春を敏感にとらえて、恋の季節真っ只中でした。参加者はじめ指導員達も、鳥達のにぎやかなさえずりに誘われて、つかの間の春を楽しんでいる姿がとても印象的でした。

池田政明

札幌市中央区 円山公園 2012/5/13

天候 晴れ

### 春に咲く植物

ようやく巡ってきた春らしい一日、新緑を引き立たせる日射しの下での観察会。園内は名残の桜を求めて、花見客で大賑わい。人ごみを避けて、坂下グランドから太子堂登山口へのコースを主に樹木を中心にゆっくりと回りました。

咲いている花は少ないながら、イタヤカエダ、カラマツの雌花、ブナの雌花などを観察。エゾヤマザクラとソメイヨシノの違いや、最近明らかになった、ブラックチェリーの話などに、参加者からの質問も多く、天気にも恵まれ、活気のある楽しい2時間でした。

山形誠一

札幌市清田区 平岡公園 2012/5/13

天候 晴れ

### 人工湿原の変わる様子を見よう

梅満開の日曜日、早朝から晴れ。駐車場は満車。すごい人出。車での参加は難しいでしょう。来年は日程の変更が必要と思われる。

花は、オオカメノキ、オオバナノエンレイソウ、ミヤマエンレイソウ、ミツガシワ、エンコウソウなど。鳥は、オオルリ、メジロ、アオジ、ニューナイスズメ、センダイムシクイ、シジュウカラなど。

佐藤佑一



札幌市手稲区 手稲山 2012/5/20

天候 晴

### 自然歩道を歩こう

前日までの肌寒さを忘れるような快晴の観察日となりました。神奈川県からの単身赴任の方を含め総勢 18 名でスタート。

満開に近い状態の花は、ニリンソウ、レンプクソウ、ネコノメソウ、マイヅルソウ、イタヤカエデで、エゾエンゴサク、オヒョウニレの種は解体してじっくりと観察しました。セミの抜け殻、クマゲラの開けた新しい穴、虫のゆりかごにも出会い、遠くにクマゲラのドラミングの音も聞こえ、森の雰囲気を楽しむことも出来ました。

図鑑やカメラを片手に、熱心に覗き込んでいる参加者も多く、新たな発見があったようです。

高田敏文



## 参加者の声



野幌森林公園 (12/5/13)

中村 弘

ようやく春らしい日ざしの戻った一日。花見客でにぎわう公園内を避け、坂下グラウンドから大師堂登山口へと、静かな林のなかを案内していただきました。

この場所は明治の開拓の頃「養樹園」と言っていて、今の林業試験場のような所だったと説明を聞き、樹木の種類の多さにも納得。

普段なにげなく見過ごしてしまう、木の花についてもいろいろと説明していただき、気が付けばあっという間の 2 時間でした。

ヨーロッパカラマツの紅い雌花やイタヤカエデの黄色い花が印象的で、また参加したいと思わせる観察会でした。



小樽市奥沢水源地 (12/5/26)

佐藤 ゆきえ

奥沢水源地、もっと前に行っておけばよかった。かなり不便な山奥にあるイメージだったが、バスで簡単に行けることが分かって拍子抜け。そして着いた途端、愕然としたのは水源地の光景をとどめていないということ。何故かという貯水池のアース式ダムを貫く配水管が破れ、堤体本体の土砂が流出したため、堰堤が取り壊されブルーシートで覆われている。6年9か月かかって大正3年に竣工したこのダムは、三角帽子の取水塔があることがわずかに水源地の面影をとどめているのみ。

某会社のコマーシャルで見る水簾と呼ばれる 10 段の階段式溢流路は、ダムからあふれる水が放水路に流れるまで落差 21m あるため、流水の勢いを和らげる役割をしていた。

がっかりして帰り、インターネットを見るとそこには在りし日の水をたたえた奥沢水源地の美しい姿があった。



# ウォッチングプラン

開催予定日	テーマ	観察地	集合場所・時刻・注意事項	交通機関	連絡先
9/22(土)	「野幌森林公園(大沢口)観察会 秋の野幌の森を歩く(子供連れ歓迎)	江別市 野幌森林公園 大沢口	野幌森林公園大沢口駐車場 10:00 集合～12:30 解散	JR バス新札幌駅発 循環バス83番, JR森林公園駅→徒歩8分 国道12号線開拓の村入口バス停→循環バス, 「文教台南町下車」徒歩10分	横山武彦 011-387-4960
9/23(日)	「秋の錦大沼」観察会 今年の実りは?	苫小牧市 錦大沼総合公園	錦大沼総合公園駐車場 8:50集合9:00～12:00 解散 昼食持参・雨天原則決行・強風日中止 雨具、あれば双眼鏡・ルーペ・図鑑など持参	自家用車のみ	佐々木昌治 0144-67-2022
9/29(土)	「突硝山」観察会 秋の突硝山をたずねよう	旭川市・比布町 突硝山	「突硝山駐車場」(国道40号沿い、旭川から来て「比布トンネル」手前の国道左側) 9:30 集合～12:00 頃解散 小雨決行 親子参加も歓迎	「道北バス」旭川駅エスタ向かい 6番(7番)乗り場 「愛別行き」8:20 発乗車 「男山公園」8:52 頃下車 (バスの時間は3月現在のものです)	原部 剛 080-6092-4347 FAX 0166-37-2462
10/6(土)	勝内川を歩く サケの遡上を期待しましょう	勝内川周辺	中央バス「奥沢入口」 9:00 集合～12:00 現地解散	市内・高速バス「奥沢入口」下車 (市内路線・高速札幌行き)	広岡賢治 0134-25-2722
10/14(日)	「秋の円山公園」観察会 木の実と紅葉	札幌市中央区 円山公園	地下鉄東西線円山公園駅 1階バス待合所 10:00 集合～12:00 解散	地下鉄東西線 円山公園駅下車	山形誠一 011-551-5481
10/21(日)	「モエレ沼公園」観察会 渡り前集結の鳥たち	札幌市東区 モエレ沼公園	モエレ沼公園 東口駐車場 9:40 集合～12:00 解散 防寒の用意、あれば双眼鏡	地下鉄東豊線 環状通東駅 9:10 発市営バス「札苗69番」 モエレ沼公園入口下車	須田 節 011-752-7217
10/21(日)	「屯田防風林」観察会 秋の紅葉と木の実 冬の使者“雪虫”の観察もしよう	札幌市北区 屯田防風保健保安林	屯田西公園グランド駐車場 10:00 集合～12:30 解散 雨具、あれば双眼鏡、図鑑など	地下鉄麻布駅発中央バス 「麻生03」又は「03」屯田6条12丁目行き、 「屯田西公園」停留所下車 徒歩2分	澤田八郎 011-762-7798 道場 優 011-772-1976
10/27(土)	「長橋なえぼ公園」観察会 晩秋の森 生き物達の冬ごもりの準備を見る	小樽市 長橋なえぼ公園	なえぼ公園「森の自然館」前 9:00 集合～12:00 解散	小樽駅前発 中央バス「塩谷」 「オタモイ」方面行き乗車 「苗圃通り」下車、徒歩1分	後藤言行 0134-29-3338
10/28(日)	「晩秋のウトナイ湖」 ハクチョウ(渡り鳥)の観察と森のお散歩	苫小牧市 ウトナイ湖周辺	道の駅「ウトナイ湖」駐車場 9:40 集合～12:00 解散予定	新千歳空港9:15 発道南バス 「苫小牧駅前行き」乗車 9:33「ウトナイ湖」下車 無料 駐車場有	宮本健市 0123-28-4720
11/3(土)	「秋の北大構内」観察会 イチョウ並木とエルムの紅葉を楽しもう	札幌市北区 北海道大学構内	北海道大学正門 10:00 集合～12:00 解散	JR 札幌駅北口から徒歩5分 地下鉄南北線 さっぽろ駅、北12条駅から徒歩10分	須田 節 011-752-7217



## 【理事会だより】

第3回 12/8/21 札幌市エルプラザ

### 1. 各部報告

- ・滝野の集い 8/11～12日、札幌市滝野自然学園で、19人(一般11人、指導員8人)が参加して開かれました。せせらぎウオッチング、はんごう炊事・ジンギスカン、星空ウオッチングなど楽しい催しが行われ、参加者からも好評でした。
- ・研修部主催  
札幌地方研修会(10/28) 場所札幌市南区小金湯 アイヌ文化交流センター ピリカコタン テーマ「アイヌ文化に学ぶ自然と環境」定員20人 希望者は池田政明(Tel・fax011-708-6313)まで願います。
- ・編集部  
会報103号発行に向けての取り組み状況が編集部長より報告されました。

### 2. フラワーソン報告

6/17日に行われたフラワーソンに本協議会として7人からなるチームを結成して初参加しました。札幌市の円山と荒井山を対象に行いました。

### 3. その他(略)

## 【編集部より】

- ・前編集長の入院のため、会報の発行がずれ込んだこともあって(2011年11月)、会員の皆様から頂いた原稿の掲載が、依然として遅れていますことをお詫び申し上げます。



北海道自然観察協議会のホームページ <http://www.noc-hokkaido.org/>

会費や寄付は 郵便振替口座 02710-1-8768

会 計 畑中 嘉輔 札幌市豊平区西岡3条13丁目12-13

観察会保険料は 郵便振替口座 02770-9-34461

観察会担当会計 小川 祐美 小樽市望洋台3-13-5

Tel/Fax 0134-51-5216 E-mail [streamy@estate.ocn.ne.jp](mailto:streamy@estate.ocn.ne.jp)

観察会報告書・資料は 観 察 部 山形 誠一 札幌市中央区双子山1丁目12-14

Tel/Fax 011-551-5481 E-mail [seiichi.y@jcom.home.ne.jp](mailto:seiichi.y@jcom.home.ne.jp)

退会、住所変更の連絡は 事務局 杉山 ルミ 夕張郡長沼町宮下3丁目1-7

Tel/Fax 0123-88-4978

事故発生等緊急時は アスカ・リスクマネジメント 担当 本間氏 Tel 011-873-2655

投稿や原稿は 編集部長 村元 健治 札幌市手稲区星置2-8-7-30 Tel 011-694-5907

E-mail [cin55400@rio.odn.ne.jp](mailto:cin55400@rio.odn.ne.jp)

表紙写真 森 繁寿



自然観察 2012年9月15日/第103号 年4回発行

(会員の『自然観察』購読料と郵送料は会費に含まれています。)

発行 北海道自然観察協議会

編集 北海道自然観察協議会編集部